

歩んだ道と考えていること

男の教師

舟 木 哲 朗

私が幼稚園へ勤めるようになった時、私の友人たちは随分驚いたものでした。

学校に關係のない友人の中には、これを「左遷」とみたむきが多く（前は中学校勤務でした）学校關係の友人の中には、何か私が失敗でもして中学校を「クビ」になり、止むを得ず幼稚園へ飛込んだのではないかと見るむきが多かったようです。

ずっと前、私が小学校に勤めていた頃には、学校に關係のない友人から「なぜ中学校へ勤めないのか」と、よく言われたものでした。世間一般では、小学校の先生より中学校の先生が偉いし、中学校の先生より高等学校の先生が偉いと思われています。多分、大部分の政治家や教育行政当局の人たちも、そう思っているでしょう。それは、現在、教員の

給与が「三本建」になっていることから、

じゅうぶん察せられることです。まして、幼稚園の先生ということになると、これは、先生の中では最下等だと思っている人が多いというのが、いつわりのない現状です。こう書くと、読者の中には「そんなバカなことがあるか」と怒られる方がおられます。全く同感です。しかし、世間がそう思っていると言っているのです。私が思っているというのではありません。「医者の中の最下等は小児科

すから、大学出の「学士」が、高等学校教諭の免許状まで持ちながら幼稚園勤めとは、なんとというだらしないいざまかと思う人がいるのも、無理からぬことです。

して相手にはしないでしよう。しかし、これと全く同じ誤りが、教員に対しては誤りでないように考えられているのですから、世間の常識というものも、当てにならないものです。こんなとんでもない常識が通用する世間で

ごく親しい昔の学友たちは、これとは別の意味で驚いたようです。それは「あんな男が幼稚園につとまるだろうか」という驚きです。いかめしくて、ぶっきらぼうで、およそ幼児教育などできそうなタイプの人間ではない。あの大声でどなりつけられたら、たいいての子は泣き出してしまふだろう、というわけです。昔、学校時代は「鬼寮長」という恐しい名で呼ばれたこともあり、戦地では勇敢な第一線小隊長でしたし、敗戦後は、まる四年以上も収容所のメシを食ってきた人間であつてみれば、なおさらのことです。

このことは、友人だけの見解ではなく、実は私自身でも考えたことです。小学校でも高学年ばかり持っていましたし、それに続く中学校勤務でしたから、小学校低学年の経験もなく、まして幼稚園となると、全然見当もつかなかったのです。

私は、軍隊の学校も含めると、六枚の卒業証書を持っていますが、時代の移り変りの時期であったため、おもしろい経験でした。師範学校が県立であった時の最後の二部生であり、同時に、官立に昇格した師範学校の第一回の卒業生です。小学校が国民学校に変わった当方で、専ら「皇国の道に則り」「鍊成」をおこなうという、あの時代としての新教育の理念をたたき込まれた最初の卒業生です。私は、熱烈な愛国者でしたし（今も愛国者のつもりですが）「聖戦」を信じていましたので、なんとしてもがんばって勝ち抜かなければならないと思っていました（もっとも、広大な国土と物量を誇るアメリカに、まともな方法で勝てないことは予想していましたが）。しかし、「勤勞奉仕」の名の下に、学校の大切な授

業を平気で放棄することには憤慨したものでした。将来「大東亜」の指導者になるべき少国民に、しっかり勉強させておかないで、どうして盟主たり得るか。

さて、中支の第一線で小隊長をつとめ、「人殺し」も経験した私は、対ソ戦に備えて満洲へ転進しました。満洲では、一戦も交えることなくすなおに武装解除を受け、続いてソ連の収容所生活を送り、昭和二十四年の末に復員、再び教壇へ立つ身になりました。

在ソ中に、私は、できる限りの方法で、ソ連の教育について研究してみました。本を読んだり、学校を参観させてもらったり、教師や児童と話してみたり……私たちのいた収容所では、所長が、かなり思いきってこのようなことをさせてくれました。そこで、ソ連では、革命後に約十年間「生活カリキュラム」を実施して失敗したことを知りました。

帰って来て、小学校のコアカリキュラムを見た時、すぐ「ああ、あれか」と思いました。単元の取り方が、三十年前のソ連のもの、あまりにもよく似ていたからです。もう

一つは、アメリカで三十年前に流行した「教育測定」と、その反省に基づく「教育評価」とが混同されていることです。更につけ加えると、アメリカでは少し時代おくれの「児童中心」と、比較的新しい「社会中心」の考え方が、これまた、いろいろな矛盾を持ちながら混在していることです。おもしろいのは、アメリカでは「ハイスクール」で実施されたコアカリキュラムが、日本では小学校へ持込まれたことです。私が予備士官学校で受けた「戦術」の教育は、最初の二カ月が系統的な講義で、三カ月目から先は、それを綜合した単元方式のものでした。

こんなことをいろいろ考えているうちに、「教育」というものがさっぱりわからなくなり、これはもう一度出なおすべきだと思つて、新制大学には「編入」という便利な方法があるのを幸に、齡三十にして再び金ボタンの生活を送り、教育心理学を専攻してみたわけです。これがまた、新制大学の第一回卒業とあつて、前の師範学校の第一回と対象的です。正直に言つて、私は、昔は幼稚園不要論者

でした。あれは、ブルジョアの子どもたちのための高級予守である、としか思っていないなかつたのです。教育心理学をやってみて、そうでもなさそうとは思いましたが、まさか、私が幼稚園へなどは、夢にも考えませんでしたし、幼児のことをまじめに勉強したことありませんでした。大学を卒業してから、中学校で、音楽と社会科の授業を持ちました。私の興味は、教科の授業よりも、むしろ、学級経営やホームルームにありました。これより前は、教育の基礎は小学校にあると思ひ込んでいましたが、どうして、中学校教育も、それに劣らず重要であることを感じました。中学校は教科を教え込む所だという考えが誤りであることを、しみじみ感じたのです。人間形成という立場から、中学校の時期は極めて重要な意義を持つていることが、理クツではなしに、実感として迫ってくるのです。

おもしろいことには、小学校へ勤めていた時に無関心であった幼稚園が、中学校へ勤めるようになってから、私の関心を呼ぶようになったということ。中学校の教育を真剣に考えると、どうしても幼年時代にさかのぼって考えないわけにはいかないのです。幼稚園へは、私の方から積極的に乗込んだのではなくて、恩師からのすすめに従い、全く見当がつかないという不安を持ちながらやって来たのですが、それにしても、中学校でのこのような経験が、私に幼稚園へ勤める決心をつけさせたわけです。

幼稚園の免許状だけは持っていました、これは、昭和二十四年の切りかえの時にもらったままで、実際は何もわかっていなかったのです。そこではじめは、手当りしい本を読んでみました。最初の一学期間は見習いのようなことで過ごしましたが、見習いからはじめなければならぬような者に教諭の免許状をくれた「免許法」も困ったものです。もっとも、法を利用して、実力もないのに免許状をもらった本人も困ったものかもしれませぬ。とにかく最初がむしやらでしたが、一学期の終りに研究発表をしなければならぬなり、まだ保育も一人前でない時でしたので、勝手な理クツをしゃべったものでした。

その年の二学期から正式に一学級を担任するようになり、現在に及んでいます。現在は、完全に一人で四十一名の担任をやっているほか、園の経営や経理についても責任を持たされる立場にあり、実は負担過重で痩せ細りつつあります。

小学校や中学校での経験から考え、また現在の幼稚園の経験から考え、更に教育心理学の立場からしても、幼児教育の重要性が、もっと世間で認識されなければなりません。その認識は、棚ボタ式にできるものではありません。われわれ現場教師が、そのための積極的な啓蒙運動をするのでなければ、百年河清のたとえに終ってしまいませぬ。

「男の先生」ということで何か書いてくれたことでしたが、少し見当外れのものになりましたので、最後に一言つけ加えておきます。私は、幼児教育を女任せにすることは正しくないと思っています。もっと男が参加しなければウソだと思ふのです。男が幼稚園の先生になったと不思議がる世間こそ、不思議な世間だと思います。(島根大学付属幼稚園)